

## 四国西予現地審査報告書

中川和之・柴田伊廣（審査員）・関谷友彦（審査補助員）

期間：平成 25 年 7 月 24 日～25 日

### 主な参加者（所属）

三好 幹二（西予市町、四国西予ジオパーク推進協議会〔以下、協議会〕会長）・九鬼 則夫（副市長）・門脇 正人（西予市教育委員長、協議会副会長（教育部会））山西 博史（文化財保護審議会会长、協議会副会長（教育部会））・井上 晋作（西予市観光協会会长、協議会副会長（観光部会））・梅原 隆志（西予市商工会、協議会副会長（ビジネス部会））・本多 東子（西予女性の会、協議会副会長（市民部会））・榎原 正幸（愛媛大学、協議会アドバイザー）・福原 純一（西予市産業建設部部長、協議会事務局長）・高橋 司（西予市商工観光課長、ジオパーク推進室室長、協議会事務局次長）・源 琢哉（ジオパーク推進室係長、協議会事務局員）・山下 元基（ジオパーク推進室主事、協議会事務局員）・蒔田 尚典（ジオパーク推進室 地域起こし協力隊、協議会事務局員）・徳居 隆利（西予市役所城川支所 支所長）・山師 義男（西予市役所産業建設課長）・徳居 勝子（西予市役所保健福祉課長）・篠藤 義直（西予市教育委員会城川教育課 課長）・浅井 秀幸（ジオクルーズガイド）・山本 和正（西予 CATV・協議会ビジネス部会員）・山田 一茂（いよココロザシ大学）・福井美咲（ガイド養成講座受講生）・河野 一男（ガイド養成講座受講生）・波田 重熙（神戸大学名誉教授）

### 各種団体（参加人数は上記のメンバーを除く）

協議会教育部会ほか学校教員 59 名、皆田小学校 6 年生 10 名、協議会ビジネス部会 6 名、協議会観光部会 8 名、協議会市民部会 28 名、ガイド受講生 32 名

### 見学地点

洲崎海岸・とんぶり館・四国カルスト大野ヶ原・城川地質館・美滝渓谷・茶堂  
愛媛県立歴史文化博物館・西予市役所・西予市役所城川支所 ほか

### 現地審査のまとめ

#### 1) ジオサイトと保全

当地域は、日本列島の構造発達を語る上で重要で、この地が名称と研究の発祥の地となった黒瀬川構造帯が付加体の中に点在している。この地質帯を基礎にして、リアス式海岸やカルスト台地や断層による山や渓谷は東西に連続している。一部、国立公園、自然公園など法的に守られているサイトもあり、今後は市民レベルでのモニタリングも検討している。

しかしながら、地域に点在する地質や地形を背景とした人文科学的な遺産を有機的につなぐテーマ・ストーリーが不十分である。特に地質遺産の価値を訪問者に分かるように十分に表現されていない。人文地理学や民俗学の成果を導入することはもちろんのこと、河川や地形の発達などの第四紀の地質学的な現象も含むストーリーの再構築が必須である。なお、推進協議会は市民やアドバイザー等と意見交換を行いながら、テーマを変更することも視野にいれて議論する予定で、今後の活動によって改善されることが見込まれる。

#### 2) 教育・研究活動

当地域は、平成 2 年に開催された黒瀬川構造帯の国際シンポジウムを多くの住民が聞いており、地域の地質の特異性を理解している。愛媛大学とも、書面による連携協定を結んでおり、地質・地理・生物・農学・観光などの他分野の専門家がジオパーク構想に 3 年前から携わっており、専門的な学術支援を受ける体制も整っている

教育面では、小・中学校から依頼がある度に事務局職員が出前講座を行っており、平成 25 年度からは「地域おこし協力隊」として教育の専門職員を雇用し、教育活動に力を入れている。学校現場でも多くの学校で積極的にジオパーク教育を取り込む姿勢があり、事務局との連携体制もとれている。

### 3) 管理組織・運営体制

四国西予ジオパーク推進協議会は市内業者や行政、小中学校、社会教育団体等が、行政部会・教育部会・市民部会・観光部会・ビジネス部会の5つにわかれ、それらを束ねる企画運営委員会に市長が会長を努め、事務局を商工観光課内のジオパーク推進係が担当しており、各部会ごとの活動も実働している。事務局には、大学で地質学を専攻した高橋司氏をはじめとする5人の職員があり、市民、学校向けの啓蒙活動や庁舎内の連絡役をしている。

2012年に作成した市勢要覧にも「子どもたちに残したいふるさとの宝物」というテーマでジオパーク構想の中に市の教育・観光・産業に結びつけて紹介している。西予市産業創出課が掲げる計画にもジオパーク構想が盛り込まれており、ジオパークを活用した地場産業の活性化、雇用の増加まで視野に入れている。厚生労働省の助成制度を利用し、平成25年度は、「ジオの恵みを活かした生活実感のある西予市雇用創造プロジェクト」として国の援助も受けられる体制が整っている。

### 4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

西予市は平成16年に5つの市町村が合併し、文化も風土も異なる地域でうまく連携が取れていなかったところへ、ジオパークという地域の共通の宝を再発見したこと、地域の連携ができるようになってきた。したがって住民はジオパーク構想をとてもよく理解しており、城川地域に、地域を盛り上げる会「やっちみる会」が発足しているなど市民レベルでの活動も始まっている。本現地審査にも、総勢約170人の人間が参加しており西予市全体におけるジオパークへの積極的な取り組みが伺える。また自然と人の暮らしをテーマとしたNPO「いよココロザシ大学」からも国内の高齢・山間地域の活性化モデルの見本としている評価も受けている。

一方で、ガイド養成やジオサイトの案内方法、パンフレット、拠点施設の展示などのジオパークの見せ方の部分が課題である。西予地域は、黒瀬川帯の研究史で非常に重要な場所であるが、一般的な訪問者が気軽に見学できるような露頭は非常に少ないため、地質の価値を伝えるのは非常に困難である。そして、地質や地形のストーリーや、大地と人々の暮らしをつなぐストーリーが不十分である。特に、現在の西予地域のテーマは、地域内の一部（黒瀬川帯）に特化しており、地域全体を表現できていない。ガイド養成講座を24年度より開講しており、総勢70人が受講しているが、ガイド内容に専門用語が多い。地質館は、黒瀬川構造帯を紹介した教育施設で旧城川町が展示の中心となっており、内容も平成2年に開催された国際シンポジウム向けの当時の研究成果をそのまま形にしたものである。

そのため、まずは地質学のみならず人文地理学や生物学、農学など分野を超えた知識を導入して、ストーリーを再構築することが急務である。その上で、拠点施設の展示やパンフレットを作成する必要がある。ジオパークの拠点施設として専門家・市民とともに協議しながら拠点施設の改修を行う計画もあるので改善が期待される。

### 5) 国際対応

現状において看板、HP、リーフレット等の国際対応は特に行われていないが、連携協定を結んでいる愛媛大学は、インドネシアのゴロンタロ州のジオパーク立ち上げにも携わっており、大学を通じたゴロンタロ州のジオパーク支援もすすめており、西予へ視察にも一度訪れている。

また、12月開催のジオパークシンポジウムにもインドネシアからの講演を予定し、通訳もつけて地域住民に国際シンポジウムに加わってもらうよう計画中。

### 6) 防災・安全

教育活動の一貫で、皆田小学校の小学生は被災地の岩手県宮古市とも交流をしており、東日本大震災の経験を通して、故郷を失った人たちがいることを学習している。しかしながらエリア内にリアス式海岸もあり、津波災害の危険性もありうる状況下で、小学生たちは、自分の地域の大地の危険性を十分は理解していないので、ジオパーク活動の一環として総合学習に地域の成り立ちと予測される災害も含めた防災教育に取り組むことが望まれる。